

# Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No. 21 [2003 / 2004 No. 4]



## contents

page

連載 1 : サンゴ礁に暮らす人々 -15 - 2

連載 2 : サンゴ礁夜話 -15 - 2

ニュース -1- 3

連載 3 : 若手会員の眼 -17 - 3

ニュース -2- 4

ニュース -3- 4

ニュース -4- 4

連載 4 : 瀬底日記 -11- 5

連載 5 : サンゴ礁関連施設探訪 -11- 5

[<sup>ちゅ</sup>沖縄美ら海水族館]

## 連載 1 サンゴ礁に暮らす人々 -15-

### ムリウトウのねずみ

慶應義塾大学名誉教授 近森 正

発掘していたトレンチから、犬の骨が発見された。完全な頭蓋骨である。島の人々がつぎつぎにやってきてトレンチの中をのぞきこむ。みんな大きな目玉をクルクル動かし、何か言いたげである。

そりゃ、吃驚するかもしれない。何故って、島には猫はいても、犬は一匹もないのだから。

見物人たちが口々に語りはじめた聞き伝えは、こんな話である。

ロンドン教会の宣教師がやってくるよりも前のこと。いまから百年より、もっと昔のことになる。白人の帆船がはじめて島にやってきた。その船のことを島の人はテ・ヴァカ・オ・ランギ、つまり「天からきた船」と呼んでいた。その船が島の沖合いに停泊したとき、ひとびとはカヌーを漕ぎ出して、近づいていった。

ムリウトウ氏族のカウトキという男は、その船に大きなネズミがいるのに気がついた。実は、それは白人の船長が可愛がっていた犬だった。島には犬がいなかったで、彼はそれを大きなネズミだと思ったのだ。なにしろ、プカプカ語には、いまだに犬をあらわす言葉がないのだから。

彼はなんとかして、それを手に入れようと企んだ。そと船に近づいて、船尾から甲板によじ登り、船の排水口にその犬を押し込んだ。そして、下にもやってあったカヌーに突き落とされた。こうして、彼はまんまとそいつを生け捕りにしてしまったのだ。



島民にとって、はじめて目にした動物だった。人々はそれをムリウトウ族のネズミと呼んで大切に飼育した。氏族の神々を祀る社に入れて、柵をめぐらし、まわりに神聖な樹を植え、花を飾り、「ムリウトウのねずみ」は氏族の権威の象徴になった。そしてプカプカの島で一生を終えたその犬は鄭重に葬られた。

他の氏族も権威の象徴になるような品物を白人の船から盗み出したけれども、とても「ムリウトウのねずみ」におよぶものはなかったという。

さて、うるさい見物人たちは黙ってはいない。発掘で出土したこの犬こそ、あの「ムリウトウのねずみ」に違いないと言い出す始末。私たちがおこなった AMS 炭素 14 の年代の測定結果は 355 ± 25yBP、17 世紀にさかのぼる。話しの年代よりもだいぶ古い。それにしても、サンゴ礁のこの島にどうして犬がいなくなってしまったのだろう。食糧として食べつくしてしまったのだろうか。

## 連載 2 サンゴしょう夜話 -15-

### 琉球のサンゴ礁石灰岩と ジョージ・ジョーンズ -150年前-

金沢大学名誉教授 小西 健二

1853 年(嘉永 6 年)ペリー提督率いる黒船(東インド艦隊)が那覇を前線基地に、6 月の江戸湾入港や翌年 3 月の日米和親条約(神奈川条約)締結を行い、7 月に琉球修好条約を締結・帰国して丸 150 年経った。この事象が、国の外交政策を鎖国から開国へと導いた契機の評価は専門家に委ねるとして、この来航の 10 数年後に日本の欧米型立憲国家の成立(1868)、それに続く琉球処分(1872-79)と変貌するなかで、日本のサンゴ礁研究は急速に変わっていく。因みに Darwin の The Structure and Distribution of Coral Reefs 初版上梓は 1842 年(天保 13 年)である。

沿岸の海防に腐心する幕府が、既に正保期作成の国絵図を、約 50 年後の元禄期(1688-1704)に改定し、琉球列島のサンゴ礁の分布を高い確度で示していることは、本ニュースレター第 13 号に紹介済(小西、2002)だが、18 世紀後半から 19 世紀前半は欧米諸国の東アジア進出という激動期で、外国船の来航が相次ぎ、航行域の海図や報告書を通じ、小笠原(1675 年日本人発見:Bonin 又は Arzonispo)や琉球(Loo Choo)のサンゴ礁が世界に知られるようになっていた。(例えばプロトン 1797; ホール、1816; ピーチー 1831; セシーユ 1846; グラン 1848)

那覇・江戸間を 3 度往復したペリー一行による遠征記(1856-58)にも琉球列島や小笠原諸島の地形・地質そしてサンゴ礁の記述がある。クレオパトラ(諸)島は巷間に誤伝される喜界島でなくて、トカラ群島の宝島が小宝島で、喜界島はバンガロー(Bungalow)島の名でよばれていた(小西、1989 MS)。

遠征隊の牧師で博物学者の George Jones が、黒ダイヤをもとめ沖縄南部から中城を経て名嘉真、名護、羽地、塩屋まで踏査した記録は、石炭をふくめ訂正点の多いものだが、北海道開拓使に招かれ、黒ダイヤ探査をはじめ北海道の地質調査を通じ、日本の地質学の黎明期を築いた米国の Benjamin Lyman の来日 1872 年(明治 2 年)に先立つ 20 年前に、同国の一博物学者によって既に日本の南端琉球の地質踏査がされていたことは特記に値する。沖縄の中・南部を特徴付ける地質が隆起サンゴ礁起源の多孔質滞水性

石灰岩で、下位の粘土質不透水層の境から湧く地下水を生活用水に利用していること、古くから板干瀬(イタビシ)と呼ばれるビーチロックの存在、そして同行したバヤード・ティラーの那覇港サンゴ礁の記載など貴重な報告である。遠征記第 3 巻はジョーンズの黄道光観測結果を示す 352 枚の天文図からなり、その 32 枚は沖縄(19 枚は波上沖停泊中、4 枚は上記踏査時)で作成され、今も学術的評価が高いという。

首里城・中城城址そして街の石垣・石畳・亀甲墓と、昔から人々の毎日の暮らしと密接に関わるサンゴ礁石灰岩は、ペリー一行に強い印象を与えたが、同石灰岩はペリー帰国に際し住民の献じた記念品でもあった。下田住民からの安山岩や函(箱)館住民からの花崗岩とともに、1848 年着工・1884 年完成の米国首都のワシントン記念碑用建材となるが、下田では最近当時の採石場が確認された。日本の国会議事堂の建材にも沖縄県からは琉球石灰岩(海成トラバーティン含む)が代表に選ばれ、瀬底島と宮古島の産と聞くと、ワシントン記念碑におさまる琉球石灰岩の産地はどこなのだろうか？

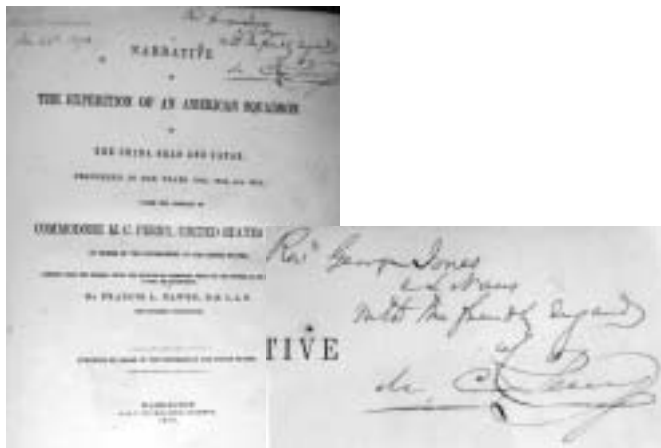
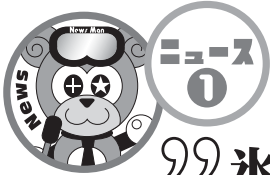


図:ジョーンズ氏へ贈呈された 1856 年刊行の遠征記第 1 巻の見開き頁、右上に記されたペリー提督自筆署名の献辞: Rev. George Jones, U. S. Navy, With the friendly regards of M. C. Perry. (金沢大学附属図書館所蔵貴重書より複写)



## 公開シンポジウム報告

# 氷期にサンゴ礁の北限はどこだったのか??

— IODP/ICDP掘削プロジェクト

「サンゴ礁前線の移動に基づく氷期・間氷期の環境変動解析」の実現に向けて —

熊本大学 松田 博貴

平成 15 年度科研費企画調査 (C)「IODP における科学提案「第四紀気候変動に対するサンゴ礁の応答」に関する企画調査」(代表者: 熊本大学松田博貴)の一環として、2004 年 1 月 10 日(土)に海洋科学技術センター・東京事務所において、公開シンポジウム「氷期にサンゴ礁の北限はどこだったのか?? - IODP/ICDP 掘削プロジェクト「サンゴ礁前線の移動に基づく氷期・間氷期の環境変動解析」の実現に向けて -」が開催された。

現在、我々の研究グループでは、「気候・海洋環境変動に伴いサンゴ礁分布域の北限・南限(「サンゴ礁前線」)は移動する」というモデルに立脚し、琉球列島を調査対象域として、1)「サンゴ礁前線」の移動に基づくサンゴ礁形成の規制環境要因の解明および気候・海洋環境変動の復元、2)種々の時間スケールでの環境変動に対するサンゴ礁生態系の応答、ならびに3)全球的炭素循環におけるサンゴ礁の機能と影響、を目的とするサンゴ礁科学掘削提案を IODP に、またワ・クショップの開催提案を ICDP に

提出している。これを実現するために、企画調査では、喜界島ワ・クショップ(2003 年 8 月)と公開シンポジウム(2004 年 1 月)を通じて、1) 様々な生物指標・化学プロキシ - からの気候・海洋情報の抽出・解析法の総括、2) 仮説検証に最大効率を生み出す最適掘削地点の選定、3) サンゴ 礁性堆積物における掘削ツ - ルと掘削計画・検層計画の最適化、について、炭酸塩堆積物、造礁生物、地球化学、年代決定などの観点から、多角的に検討を加えてきた。

今回の公開シンポジウムでは、8 月の喜界島ワークショップでの議論を受けて、特に

- ・サンゴ礁北限域の現世サンゴ礁と礁性堆積物
- ・亜間氷期型サンゴ礁段丘
- ・緯度変化に伴う造礁サンゴ群集と大型有孔虫の生物地理的变化
- ・サンゴ骨格から読み取る環境記録

をメインテーマとして、13 の講演と総合討論を行った。当日は、研究グループのメンバーに加え、学生を含む多数の参加者を迎え、熱のこもった質疑・討論が繰り広げられた。本研究グループでは、サンゴ礁掘削の実現へ向け、今後も地道な調査活動を通

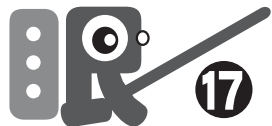
じて、これまでデ - タ蓄積の乏しい北限域のサンゴ礁ならびに礁性堆積物の検討を継続するとともに、世界に向け情報を発信する予定である。興味のある皆さまは、是非、ご参加いただきますようお願いいたします。(松田博貴; hmat@sci.kumamoto-u.ac.jp)

### < サンゴ礁掘削研究グループ >

- 井龍康文(東北大学; 石灰藻)
- 坂井三郎(JAMSTEC; 有孔虫・古地磁気)
- 佐々木圭一(金沢学院大; 放射年代)
- 佐藤時幸(秋田大学; 石灰質ナノ化石)
- 杉原 薫(福岡大学; 造礁サンゴ)
- 辻 喜弘(石油公団; 炭酸塩堆積学)
- 徳永朋祥(東京大学; 水理地球化学)
- 中森 亨(東北大学; 造礁サンゴ)
- 藤田和彦(琉球大学; 底生有孔虫)
- 町山栄章(JAMSTEC; 造礁生物・海洋調査)
- 松田伸也(琉球大学; 石灰藻)
- 松田博貴(熊本大学; 続成作用; 代表)
- 山田 努(東北大学; 生物骨格化学プロキシ - )
- 山田茂昭(金沢大学; 炭酸塩堆積学)

## 連載 3

### 若手会員の



A young member's eye

九州大学大学院、理学府生物科学専攻、  
博士後期課程 3 年 野澤 洋耕

ついにニュースレターの癒し系コーナー「若手会員の眼」の当番が、僕の所に回ってきました。ばんざーい。僕自身、毎回この連載を楽しみにしておりますので、とても嬉しいのです。皆様のコンピューター疲れした目を思い浮かべつつ、今回もやわらかく行ってみたいと思います。

僕が在籍している九州大学天草臨海実験所は熊本県天草郡の下島というところにあり、熊本市までは車で約 3 時間もかかります。あまりに遠いので、天草の人と同じ県内なのに「熊本に行ってくる。」とかいいます。実験所がある苓北町は人口 9 千人、天領アジ、うに、緋扇貝、レタスで有名です。のどかです、高齢化です、過疎化です。

指導していただいている野島先生のナイスガイぶりは地元でも有名です(目を閉じて、春の天草ののどかな自然を想像してみてください)。そんな先生から、昔

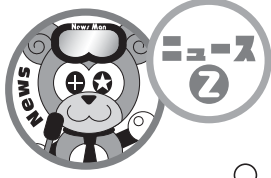
一度だけ「お前はナイスガイ!」とお酒の席で言っていただいたことがあります。午前 2 時ごろでしたか、今でも僕の自慢です。先生には今までに多くの人生指導をお酒の席でいただいてきましたが、これからは研究の指導も受けたいと思っています。

実験所には現在十数名の学生がいますが、主にサンゴを扱っているのは僕だけで、少し寂しい思いをしています。思い当たる主な理由としては、サンゴが実験所の周りにはほとんどいないことだと思います。僕はこの 3 年間、実験所から一番近いサンゴ群集への片道 75 km の道のりを愛車(スズキアルト(軽))でひた走ってきました。特に、7 8 月の産卵シーズンは、ほぼ毎日通いました。行って、潜って、弁当食べて、少し昼寝して、潜って、帰ってきて、タンクチャージして、器材洗った後は、何もする気がせず、多くの貴重な時間を失いました。結果、今年 D 4 に突入いたします(アム口、行きます、泣きます(笑))。

高緯度域のサンゴ群集を研究するのは大変です。とず、漁協が強いので、研究の許可をとるのに手間がかかり、許可が取れても地元の漁師から、「ニーちゃん、何ととるんか」としよっちゅう密漁者扱いのプレッシャーをかけられます。エントリーは転石と雑草を分けて入り、海藻ゆらゆら不気味ゾーンを経て、サンゴ群集へとたどり着きます。ボラ、スズキ、

カワハギ、タイ、キビナゴなどの食べられる魚が出迎えてくれます。ワカメ、コンブ君も一緒です。しかし何よりも僕をブルーにさせるのは、透明深緑色の海の色です。透視度も低く、不気味で、フィールドに生息しているという巨大ヒラメ?(約 1.5 m?)とアカシモクザメの存在が僕をさらにブルーにしてくれています。体調とこのブルー度は有意な相関関係にあるようで、疲れが溜まってくると、かなりオドオドと挙動不審になり、一人なのに水中で急に振り返ったりして、背後からの何物かの接近(本当は何もない)をしきりに警戒しています(笑)。このような苦勞を伴う研究域ですが、(1)約 100 種類のサンゴが群生し、沖縄にも引け劣らない健全なサンゴ群集が点在している、(2)放卵放精も 7 8 月にかけて行われ、幼生生産の場となっている、(3)他のサンゴ群集から離れている為、一つのサンゴ群集として他の群集の影響を除く必要のあるいろいろなモデルの研究ができる、など良い点もたくさんです。

最後になりましたが、僕はオーストラリアに修士の間留学していた経験がありますが、大学のシステム、年間スケジュール、気質、等の違いからいろいろ泣かされました。今回は字数の関係上書けませんが、もし真剣に行こうと考えている学生の方がいらっしゃいましたらお気軽にメール(yokon@ambi-ku.jp)をください。後悔はさせません!



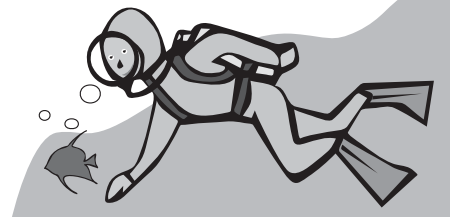
# 潜水に潜む危険

海洋科学技術センター 総務部 竹内 久美

スク・バ潜水をスポーツという観点からとらえた場合、陸上における他のスポーツと比べて、極めて短時間でマスターできるのが特徴である。それは、潜水を行う際の主な運動がフィンキックであるために、本来、その技術を習得し、さらに、うまい呼吸法さえマスターすればよいからである。ところが、近ごろはBCの普及に伴い、その便利さに甘んじて、十分なフィンキックができないまま潜水を楽しむレジャーダイバーが存在することには驚かされる。確かに、碧く澄んだ海中の光景は、限り無くダイバーを魅了するが、フィンキックがうまくできなかったために仲間とはぐれたり、船や陸に辿り着くことができなかったために、事故に遭遇することがある。楽しいはずの潜水だが、その裏には常に危険が潜んでいる、ということを忘れてはならない。

そもそも潜水は、水中で、しかも高圧といった特殊な環境下で行われるために、通常、われわれが地上で行う各種のスポーツでは起こり得ないような事故や障害が発生する。例えば、圧外傷や減圧障害、それに溺水などはその典型である。また、ひとたび空気の供給が途絶えたり、意識障害が起こったり、行方不明になった場合など、陸上では必ずしも大事故につながるとは限らない事態が、潜水では死に直結する重大事故につながる可能性が非常に高くなる。特に、溺水やエア切れの場合は、ほとんどがパニックを引き起こし、逃げ場のない水中では、生還することが困難となる。潜水による死亡事故の原因に関しては、毎年報告される「潜水事故の分析：日本海洋レジャー安全・振興協会編」に集計結果として示されるが、初心者では、技術不足や監視

体制の不備が、ベテランでは、残圧チェックの怠りやバディ潜水の不遵守、それに気象・海象の見極めの甘さなどといった馴れによる油断とも思える行動が重大事故を引き起こしているようである。そして、近年、体調の不調が原因となって死亡事故が増加してきていることも無視できない。したがって、潜水を安全に行うためには、まず、「十分な知識・技術を身につけ、決して無理をしない」「十分な監視体制を敷き、いかなる場合も単独潜水をしない」「万全の体調で臨む」といったことなどを再認識することが肝要である。



## 『日本のサンゴ礁』 Coral Reefs of Japan の制作について

(財)自然環境研究センター  
木村 匡

日本サンゴ礁学会と環境省は、今年6月の「国際サンゴ礁シンポジウム」に向けて、日本のサンゴ礁を紹介する『Coral Reefs of Japan』作成しています。

これは、日本のサンゴ礁及びサンゴ群集の現状を概括的に明らかにし、サンゴ礁の保全に関わる関係者が、各地域の全国的な位置づけを理解し保全対策に活用すること、および将来のサンゴ礁保全戦略の基礎情報として役立てることを目的とした冊子です。琉球大学・土屋誠教授、東京工業大学・瀬岡和夫教授、東京大学・茅根創助教授を編集コア委員として、自然環境研究センターを事務局に現在急ピッチで編集作業が進められています。

本の構成は以下の6章から成り、30名以上の方々に執筆していただいています。

- 第1章 サンゴ礁の分布
- 第2章 サンゴ礁の攪乱
- 第3章 サンゴ礁モニタリング
- 第4章 サンゴ礁の持続的利用と保全
- 第5章 サンゴ礁の修復と再生
- 第6章 日本各地のサンゴ礁の現状

シンポジウムまで残すところあと少し。編集もいよいよ大詰めに入ってきました。参加者全員に配布するほか、日本語版の『日本のサンゴ礁』としても制作する予定ですので、皆さんお楽しみに。

## 国際ワークショップ 「地球規模変動とサンゴ礁」報告

2004年1月13日から16日にかけて、地球規模変動とサンゴ礁に関する国際ワークショップが東京と箱根で開催されました。

国立環境研究所 山野 博哉

国際サンゴ礁シンポジウムでは、地球規模変動とサンゴ礁に関する6つのミニシンポジウムが開催され、スペシャルセッションでそれらがまとめられました。

本ワークショップの目的は、スペシャルセッション開催前に各ミニシンポジウムの座長が集まって、地球規模変動とサンゴ礁に関するまとめの準備をおこなうことにありました。13日には公開シンポジウムが開催され、各ミニ

シンポジウムの座長からミニシンポジウムの目的の紹介がおこなわれました。その後の専門家会議では、投稿された要旨の内容に基づいて各ミニシンポジウムの構成が決定され、国際サンゴ礁シンポジウムにおけるスペシャルセッションでは、国際サンゴ礁学会と共同で地球規模変動とサンゴ礁に関する声明を発表することになりました。スペシャルセッションは国際サンゴ礁シンポジウムの最終日におこなわれます。

< 写真説明 >  
ワークショップ参加者

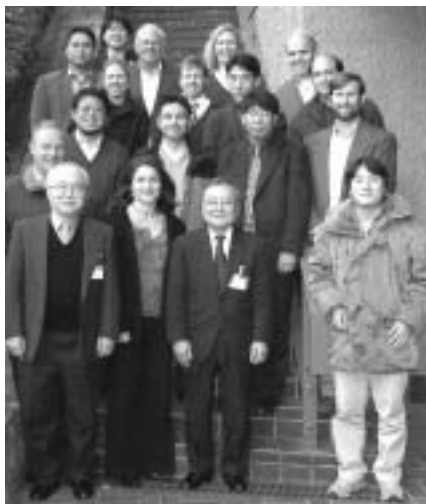
1 列目左から：小西健二, Andrea Grottoli, 山里 清, 山野博哉

2 列目左から：Chris Langdon, 茅根 創, 高橋啓介, 鈴木 款, Mark Eakin

3 列目左から：Joanie Kleypas, William Skirving, 日比野浩平, Juan Mate

4 列目左から：菅 浩伸, 藤村弘行, Roger McLean, Peggy Fong, Al Strong

その他に、下池和幸, 渡邊 敦, 飯嶋寛子 (敬称略)



## 連載 4

瀬底日記 SESOKO  
群むりぶし星 -11-琉球大学熱帯生物圏研究センター  
瀬底実験所 中野義勝

今朝は見事な風だ。2月17日8:45の表層水温20.4。朝の観測はひとまず終えて、春めいた日差しの中で桟橋の先に腰掛けてみる。足下の桟橋のコンクリート壁には、びっしりオハグログガキがしがみついている。しがみついたオハグログガキにガンゼキボラが覆い被さる。最近増えたアバサーが、あちこちチョコチョコ泳ぐ様が愛らしい。そのアバサーに驚いて、群を割るミジユンの仔魚たちもどこかのんびりして見える。でも油断は禁物、ダツの細長い影は宙を滑るように移動している。ダツの割いた水底からは、大きくもない

シマダコが長い足を次々スライドさせて現れて、また背景にとけ込んだ。ナガウニたちの団地では、いつもと変わらぬ顔ぶれがバリカメノコクメイシと一緒にじっとしている。ミドリイシたちもずいぶん大きくなってきた。カイメンソウの周りには、ちぎれたアナアオサが揺らいでいる。ガンガゼの群に混じるように、岩陰からはウミシダの黒い腕がなびいている。ツノダシの通り過ぎたハマサンゴの横にはニセクロナマコが寝そべっている。その上を遊覧するのはカブトクラゲ、オビクラゲ、優雅に見えるが、カブトクラゲの胃袋にはたくさんのコベボダが詰まっている。ウドの太木みたいに突立ったヤムシの大顎に気をつける、ヒョロヒョロのヨウラククラゲの無数の刺胞はどこまで届く？

明るい部屋から闇夜に出ると、だんだん星が増えてくる。星はいつもそこにあるんだが、普段はこちらの準備ができていない。眺めたり、見つめたりして過ごすこんな時間には、生き物たちもどんどん増えてくる。数え上げ始めたら、50位まで来て怪しくなってきた。何だったかな、なんかの仲間、何してるんだ

ろう。意識の世界は神経パルス、伝達物質は漫画の星のようにキラキラしてるのか。胡蝶の夢と悟るわけではなく、只いたずらに興味が次々わいては消えていく。

しばらくぶりに卒業生が尋ねてきた。桟橋に立っている私を見て、まだやってるんですかと。ずっとやってるよと答えた。

春は別れと出会いの季節。たくさんの学生が入り出る季節になった。今年はどんな学生が、どんなテーマと出会うのか。



## 連載 5

サンゴ礁関連施設  
深訪 INQUIRY  
ちゅ 沖縄美ら海水族館(財) 海洋博覧会記念公園管理財団  
魚類課 野中 正法

おかげさまで2002年11月の開館から1年ちょっとが経ち、約400日間で300万人の入館者をお迎えすることが出来ました。「沖縄美ら海水族館」もだいぶ知名度が上がってきたようです。あちこちで紹介されることも多くなり、うれしい限りなのですが、どうしても当館の売りはジンベエザメとオニイトマキエイ(マンタ)でも今回はせっかくの「サンゴ礁関連施設」としての紹介ですから、「サンゴ」を中心に書かせていただきます。



造礁サンゴを飼育展示する水族館も最近では多くなり、「サンゴの展示」だけでアピールするのは難しいご時世となってきました。「沖縄の水族館」としてはこれだけメジャーになりつつあるサ

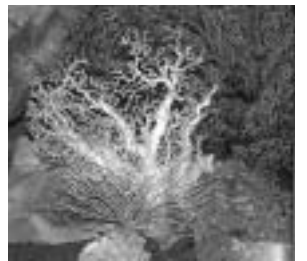
ンゴの展示は避けては通れないところ。設計段階から、「サンゴが飼える」水槽めざして取り組んできました。地の利を生かして大量の新鮮海水を取り入れる(現在300トン/時)、屋根をなくし天然光を取り入れる。水槽の長辺を東西方向に伸ばし、北側の斜面にサンゴを配置し南側を観覧面にする・・・等々の工夫をしました。また、サンゴだけでなくサンゴ礁全体の展示をする意味で、水深3.0m、水量300トンという大水槽に仕立て上げました。

展示している造礁サンゴは約70種800群体。しかし、専門家の皆さんに見て頂ければすぐおわかりと思いますが、枝状のミドリイシ類が多く、卓状やコリンボースは非常に少ない印象があると思います。これには深い訳があります。実はこの枝状のミドリイシ、水族館が新設されるずっと前、1995年に実験用として採集された *Acropora nobilis* と *A. microphthalma* だったのです。これらは実験終了後に海に戻す予定でしたが、その時にあ

の白化現象が起こったのです。あれから水族館のある本部町周辺にはミドリイシ類は完全にいなくなりました。ミドリイシ類の展示をめざしていた我々に残された道はただ一つ。この虎の子のサンゴ達を自力で増やすことです。幸い屋外に大規模な蓄養施設があり、ここで群体数を増やし、展示水槽に入れていきました。新しい住処を気に入ってくれたのか、数群体は毎年槽内 spawning も見せています。

白化現象でほとんど見られなくなってしまった種はいくつかありますが、そのうちのひとつがハナヤサイサンゴ *Pocillopora damicornis* です。しかし、当館の水槽にはたくさん入っています。しかもこれらは1998年以降に手に入れたもの。実はこいつらは採集物ではなく、勝手に入ってきた「流れ者」なのです。これも新鮮海水をふんだんに使っているおかげな

のですが、それでも入ってきて水槽の壁に定着するのはほとんどハナヤサイ。彼らの繁殖能力には驚かされます。展示水槽の、向かって右側の壁にびっしりチビちゃんが付いていますので、これもどうぞお見逃しなく。



これまでは「サンゴの海」と名付けられた大水槽の紹介でしたが、もう一つ紹介したいのが出口に近い「深海コーナー」に展示されている宝石サンゴです。宝石として加工されるサンゴは *Corallium* 属と *Paracorallium* 属の数種です。日本ではアカサンゴ *Paracorallium japonicum*、シロサンゴ *Corallium konojoi*、モモイロサンゴ *C. elatius* の3種が産出しますが、前2種とモモイロサンゴの近似種(Dr. Bayerによると *C. elatius* ではないとのこと)を飼育展示しています。沖縄本島周辺の水深250mから無人潜水艇で採取したもので、3月で丸2年を迎えましたが今日も元気にポリブを伸ばしています。飼育例は世界でも稀ですので、今後その生態や成長について調べていこうと思っています。

6月にICRSが沖縄で開かれます。その際にはちょっと足を伸ばして来て見て下さい。空港からはちょっと遠いですが、JCRS会員の皆様なら遠路訪れた甲斐を見いだして頂けると思います。

沖縄美ら海水族館  
(財) 海洋博覧会記念公園管理財団 魚類課  
〒905-0206 沖縄県本部町字石川424  
TEL 0980-48-2742 FAX 0980-48-4399

## 編集後記 Edit postscript

ながります。今年も楽しく調査やレジャーに出かけることができるよう、みなさん十分な安全管理に心がけましょう。

編集担当 杉原

「毎月29日は肉の日!」という口実を作って焼肉屋に通う習慣を半年我慢した結果、学生時代に作ったウェットスーツが楽に入るようになりました。日頃の健康管理は安全管理につ

JCRS  
Japanese Coral Reef Society  
2004年4月1日発行日本サンゴ礁学会ニュースレター  
Newsletter of Japanese Coral Reef Society  
No.21 [2003 / 2004 No.4]

● 編集・発行人 / 山野・波利井・中井・杉原・木村・梅澤・野崎 ● 発行所 / 日本サンゴ礁学会  
● 事務局 / 茅根 創 <kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp>  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院  
理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358



## 太平洋に浮かぶ真珠の首飾り

北緯 4 ~ 13° 東経 160 ~ 175° の太平洋に広がるマーシャル諸島。  
 周囲に広がる 29 の環礁は、1225 の島々と 870 のリーフから構成されている。  
 手つかずで残されてきたこの海域には、サンゴの原生林が今も生きている。  
 世界でも稀な環礁という地形で構成されており、  
 その美しい島々は『太平洋に浮かぶ真珠の首飾り』と呼ばれる。

## MOI にできること

マーシャルズ・オーシャニック・インスティテュート (MOI) は  
 マーシャル諸島の自然をより科学するために設立された機関であります。  
 マーシャル諸島のサンゴや海洋生物研究に関心のある方々の協力をしています。  
 研究データを活かしたエコ教育にも力を入れ、自然保護につなげます。  
 この海とともに生きること、これが MOI にできることです。



マーシャル諸島について  
 詳しく知りたい？



### MARSHALLS OCEANIC INSTITUTE

P.O.BOX 1473 MAJURO, MH 96960 MARSHALL ISLANDS

TEL&FAX 692-625-3483 e-MAIL [shin@e-mit.net](mailto:shin@e-mit.net) [www.e-mit.net](http://www.e-mit.net)

### ECO TOUR & EDUCATION

エコツアー&エコ教育

### DIVE TRAINING

ダイブトレーニング

### MARINE SCIENCE LABORATORY

海洋研究所&共同研究機関